

## 小学校教材「源氏物語」の反響・その四

——教師用指導書での「源氏物語」の扱い——

有 働 裕  
(国語教室)

教材「源氏物語」が掲載された、第四期の国定教科書「小学国語読本」巻十一の使用は、昭和十三年の四月からであった。この当時の教育関係の雑誌には、各出版社から発売された、教師用の指導書の広告が目立つ。「改正教科書指導の鍵は之だ!」「科学的国語指導の妙諦此の比類なき構成を見よ」といった宣伝文がそこには踊っており、教師への激しい売り込み合戦を想像させる。

このような教師用指導書において、「源氏物語」はどのように扱われていたのか。筆者は既に別稿において、この類のもののうち、国語教育学会編「小学国語読本総合研究」巻十一(昭和十四年三月)、芦田恵之助の「小学国語読本と教壇」巻十一(昭和十三年四月)「教式と教壇」(昭和十三年五月)、友納友次郎の「教法精説新読本の指導精神」尋常科用巻十一(昭和十三年四月)について言及した(注1)。本稿では、それ以外の、管見に入った四つの教師用指導書について述べ、この教材の受けとめられ方の多様性を確認することとする。

いずれの指導書も、まず、巻頭の総論の中で、全体構成と各教材の位置付けを述べ、その後各論として、教材ごとに一章を設けて言及していくという形式になっている。それらの中から、「源氏物語」に関する内容のみを紹介し、考察を加えていくことにする。

なお、文献の引用にあたっては、かなづかいは原文どおりとし、漢字の字体は、すべて今日の一般的なものに改めることを原則とした。

### 一、秋田喜三郎「小学国語読本指導書」——女子教材としての重要性

秋田喜三郎(注2)著の「小学国語読本指導書」尋常科用巻十一は、昭和十三年四月に明治図書株式会社から刊行されている。

冒頭に置かれた「巻十一の概観」の「一 巻十一の機構」には、次のように、この教科書における「源氏物語」の位置づけが記されている。

1 国民文化の昂揚 新読本は前学年までに、先づ国体観念を樹立し、国史

の体系を与え、名將偉人による武士道的精神を伝へ、更に前巻に於ては国民精神の振起を中心題目としたのであるが、本巻に於ては国民精神を基調としてこゝに創造せられた国民文化を主題とするもの、やうである。巻頭に「吉野山」を掲げて日本精神を高調し、巻尾には「日本刀」を以て之を結び、この間に日本精神により創造せられた国民文化の花とも称すべき教材を配列してゐる。たとへば、「見渡せば」「源氏物語」「法隆寺」「皇国の姿」「古事記の話」「松阪の一夜」「虫の声」「鐵眼の一切経」の如きは国民文化の誇とすべき主要教材である。

2 国民活動の重視 国民文化に枢軸をおく本巻は、また国民の活動を重視し、文化建設の跡を明らかにしてゐる。国民の活動は国土を環境として、或は古道精神の顕現に、或は芸術文化の創造に或は皇道精神の宣揚に、国民の生活活動に関する教材が多く収録せられてゐる。例へば「皇国の姿」「古事記の話」「松阪の一夜」「吉野山」等は古道精神の顕現であり、「見渡せば」「京都」「法隆寺」「源氏物語」「虫の声」等は国民芸術の創造であり、「日本海海戦」「間宮林蔵」「空中戦」「日本刀」等の如きは、皇道精神の宣揚である。

(3以下は略す)

文部省の「小学国語読本尋常科用巻十一編纂趣旨」(昭和十三年)の記述よりは詳しいが、内容としてはそこから一步も逸脱するものではない。また、「源氏物語」をこの巻において特別に重視するような書き方もされていない。

続く「二 教材の内容」においては、次のような記述が見られる。

2 文学的教材と国民文化 国民文化を特徴とする本巻に於ては、古来の文学芸術に関する教材を多く採択するやうになつたのは自然である。「見渡せば」は「古今和歌集」を背景として素性法師・紀貫之・藤原敏行等歌人の秀歌五首を出したものであり、これに対して「虫の声」は芭蕉・蕪村・鬼貫等俳豪の名句を掲げてゐる。また、「源氏物語」は我が国文学最高の世界的作品

の一部を紹介せるものであり、「法隆寺」はこれまた我が国最高の古代芸術を歎賞したものである。更にまた「古事記の話」と「松阪の一夜」とは文学として歴史として我が国の古道を明かにしたものである。その他「鐵眼の一切経」の如きは国民の文化的事業として見るべく、「月光の曲」は他山の石として外国の精神文化を採入れたものと思はれる。

7 女子的教材の重要性 女子的教材としては「源氏物語」と「姉」があげられ、その他に「月光の曲」も関係深きものである。卷十の女子的教材に比し、課数や、少き観があるけれども、源氏物語は世界的文学として女子の才能の偉大なるを想見すべく、「姉」は女子の道として最も重要な結婚を説いたものであるから、女兒の教育には何れも重要性を有するものである。

国民文化教材としての「源氏物語」の位置づけは、やはり『編纂趣旨』で読本編纂者自らが解説したものと大きく異なるものではない。一方、女子教育の教材としての重要性の強調は、読本の編纂者井上越の執筆した『小学国語読本総合研究』の「要説」と芦田恵之助『小学国語読本と教壇』を除き、本書以外には見られない観点であり、この指導書の一つの特色であるといつてよい。ただし、秋田が「女子的教材」としての価値を認めているのは、教材前半の、「源氏物語」という大作家を書いたのは紫式部という女性であり、また、この作品は女性でなければ書き得なかった、という解説の部分に対してである。

次に、「源氏物語」について直接言及した章での記載内容であるが、これは、大きく、「指導細目」「文章研究」「指導過程」の三つに分かれている。

「指導細目」には、ごく一般的な内容が記されるにとどまるが、「注意」の四番目として、次のような記述のあることが注目される。

紫の君の如き作品を読ませる場合に、児童はやゝとすれば道徳的に批判するものである。これは日頃の指導にもよることであるから、文学的に人間の生活として人情美よりこれを味読させるやうに工夫しなければならぬ。

この見解は、編纂者の井上越のものとは異なったものとなっている。井上は、『小学国語読本総合研究』卷十一の「要説」において、この教材後半の口語訳の部分に、次のように言及している。

先づ主題は源氏物語中の婦人の理想として表現された紫の上の生立である。紫の上の幼時は、ごく無邪気な少女として描かれてゐる。普通の小説などによく見がちな、やゝませた伶俐さを持つた女でなく、将来人間として伸びて行く余裕のある少女に出發してゐる所に、作者が非凡な人生批評眼の持主であつたことを先づ考へさせられる。

井上は、口語訳の部分の紫の上の無邪気な姿に理想像を見出し、女子教育的な意義までも強調している。このような見解に対して、秋田はこの紫の上の姿に、道徳的に批判されても仕方がないような未熟さや頼りなさを読み取るが、それを批判するのではなく「人情味」をもって理解するのが、文学としての読みだと述べているのである。秋田が女子教育の教材たりうると考えたのは、先にも引用したように、むしろ前半の解説部分における、「やゝませた伶俐さを持つた女」であつたともとれる紫式部の「実像」の方であつた。

次の「文章研究」では、『源氏物語』についての一般的解説や教材文の表現の分析がなされている。ここでは、『源氏物語』の否定的評価に関しては一切ふれられていない。また、教材文の表現の「すぐれた心理描写と生きた会話」への賛美が目立つ。かなり教材文の記述の細部にまで立ち入り、「原文の筆致」との関連を強く意識した書き方がなされている。

たとえば、「若紫」を口語訳した部分の前半については、

この辺最もよく原文の色を出してかはい、女の子を描出してゐる。その着物の色合といひ、切揃へた髪が扇の様に広がつて肩の辺に掛る様など、何処までも描写的にして如何なる人の子であるか、一切文面より匿している。

と評し、末尾の部分については、

このかはい、女の子が、目を伏せてゐたのが、とうとう伏せになつて泣入る、美しい髪はらはらと前へこぼれる、何といふ美しい物語であらう。

前に「人間を生きく」と、美しく、細かく写し出してゐるかゝわかるでせう。」と述べてあるが、この(一)にあらはれた物語はさすがに原文の筆致を伝えて、何処を讀んでも美しい優しい女性の筆の力が現れてゐる。

と述べられている。常に教材文と原文とをオーバーラップさせながらの、やや恣意的感情の伴つた評価となつてゐる。

末尾に「参考」として、『紫式部日記』と「若紫」「末摘花」の当該部分の原文が添えられているのも、こういう意識からすれば当然のことであろう。このあたりは、『淫靡の書』への反発を懸念する編纂者にくらべてかなり樂觀的な姿勢といえる。

最後の「指導過程」は、四時間の配当での授業の詳細を記すが、語釈と構成、内容の要約が中心でとりわけ注目すべき内容は見当たらない。先の描写へのこだわりが、ほとんど反映されていないように思われる。

## 二、宮川菊芳「小学国語読本解説」——巧みな人物描写・心理描写

東京高等師範学校訓導の宮川菊芳（注3）の「小学国語読本解説」尋常科用巻十一は、昭和十三年四月に明治図書株式会社から刊行されている。

巻頭の「新読本巻十一の機構について」は「巻十一の編纂精神について」「教材の分類」「巻十一の教材配当」の三部からなるが、教材「源氏物語」についての、とりわけ個性的な見解は見当たらない。すなわち、この巻を「国民文化」中心の巻」とし、その中心教材に「源氏物語」を据え、その内容を「紫式部の人物を描き、源氏物語の概念を示し、且つその内容の一端を示す」と定義しているにとどまる。

それに比して、「第四 源氏物語」の記述はやや個性的である。これは「一 教材観」「二 指導観」「三 参考資料」からなっている。ここでの、この教材本文に対する言及は、他の指導書に比べて詳細なもので、語釈なども充実している。そして、筆者自身の見解が随所に示され、とりわけその描写についての礼讃が目立っている。

たとえば、口語訳の部分については、「一 教材観」の中の「文旨」において、次のような積極的評価が示されている。

又第二節は、不幸な運命となつた幼い紫の君の淋しく悲しい心持を慰めようとする源氏の君のユーモアなしぐさを題材とした微妙な心理描写であり、共に驚くばかりに繊細な筆致になるもので興味の尽きないものがある。

また、「人物描写の巧」として、次のように教材本文を引用しながら評価している。源氏物語は、当時に於ける社会の生活面を細かく写し出したもので、殊にその人物描写並に心理描写の点に至つては全く真を穿ち堂に入つたものがある。

「何といふかはいらしい子であらう。切揃へた髪が、ともすると扇のやうに広がつて肩の辺にゆらく掛るのが目立つて美しく見える。」

かういつた様な人物描写の美しい筆致であるから一人に魅力が多い。「さすがに子供は、じつと聞きながら目を伏せてゐるが、とうとう伏せになつて泣入つてしまつた、とたんに美しい髪はらくと前へこぼれる。」

どこまでも流麗な描写、可憐な少女のしほれた美しい姿が目に見える様だ。

「紫の君はとうとう笑ひこけてしまつた。「わたしの鼻がほんたうにかう赤

かつたらどうだらうね。」「まあ、いやなことをおつしやる」——紫の君は絵の具がほんたうにしみこんだら、にいさんがお気の毒だと思つた。源氏はわざと拭いたまねをして「ほら、すつかりしみこんでしまつた、落ちないよ。」といつて、まじめな顔をしてゐる、紫の君は心配さうに、水入の水を紙にひたして源氏の鼻を拭きにかゝつた……。」

対話の言葉といひ、細かい心理の動きをうかがはせる動作の描写といひ、現代の作家もはだしといふ所。

このように宮川の主張は、論理的・実証的な評価というよりも、いささか感情的な礼讃となつてしまつてゐる。その描写を褒めたたえるにしても、それが原典の「源氏物語」の描写に向けられたものか、教材本文に向けられたものか、その区別が不明瞭である。というよりも、両者をほぼ同一視しての評価であるといふべきかもしれない。この点は秋田の執筆態度とほぼ同一であるといえよう。

原典と教材との関係については、「文の主要観点」に次のようである。

源氏と紫の君（紫上）の関係について、原本通り児童に話すことは面白くないから、あくまで之を美化し文学化して、以て源氏物語りの人物描写並に心理描写の巧みなことを感得せしめることを主眼とすべきである。

原本によれば、源氏は少女紫上を見て之を想ふの心深く、幾度か尼や僧都に使をやり紫上を貰ひ受けんことを請ひしが容易に許されず、折から紫上の父兵部卿官が紫上を自宅に引取らんと噂を聞き、源氏は家来をやつて不意に紫上を迎へひそかに二条院にかくまつたので、紫上も当惑すれば父の兵部卿官も失望と疑惑とに胸を痛めるなど色々面白くないこともあるが、かうした事などは児童に知らしめることなく、飽迄も小説体としての美文鑑賞を第一とすべきである。

この節では源氏が淋しい紫の君の心を慰めるためにいろ／＼と工夫をこらす一種の上品なユーモアであるが、そこに見られる精細な描写は、実に生き／＼としてゐる文学味の極めて豊かなものである。だから本文に関しては二人の対話と動作と心理の動きとを仔細に考察してその妙味を会得する様指導すべきである。なほ終りに此の節に直接関係ある原文も掲げておくから、それと本文とを対照しつゝ、しみ／＼と表現美を味ふ様にして頂きたい。

原典「源氏物語」を「文学化」するとはどういうことか、原典のままでは「色々面白くないこともある」とはどういうことか、「小説体としての美文鑑賞」とはどういうことか。いささか趣味的筆致に流れた、不明瞭な記述が目立つ。その反面、他の指導書と比べて、この教材と時局とを無理やり結び付けたような記述は少な

くなっている。

「二 指導観」の中では、実際にどのような授業を行うかという観点から、宮川の考えが具体的に示されている。

たとえば、「指導上の留意点」として次の四点が掲げられている。

1 紫式部について……紫式部の略歴、人となり、才能、功績などについて付加敷衍する。

2 源氏物語について……源氏物語の構想、内容の大体を知らしめ、且つ其の偉大なる文学的価値を会得せしめる。但し該物語の遊蕩淫猥なる個処などは決して児童に話してはならぬ、あくまでその文学的価値の方面を力説すべきである。

3 原文と対照……本文の(一)(二)の両小節とも原文としても、決して非教育的な部分がないから、或る部分は原文と本文を対照せしめつ、本文の如何に文学的であるかを理解せしめるがよい。

4 人物描写について……本文の人物描写の点に於て特に優れてゐることは全く比類少きものであるから、此の点よく鑑賞して、その文学的価値を認めしめる様に指導すべきである。

はたして小学六年生に「源氏物語」の原文を示して、その文学的価値を認識させることは可能なかという疑問も生じるが、そういったことが全く問題にされずに述べられていること自体に、宮川の文学教育観がよく示されているといえよう。原典重視の姿勢は他の指導書からも読み取れるが、その活用をここまで明確に主張したものは他に例がない。

また、「約三時間」で授業を行うものとして「指導過程」が提示されている。ここでは、「主なる吟味事項」として、児童への質問事項が詳細に記されている。このような例は他の指導書には少なく、宮川の教材観・指導観の具体化でもあるので、以下その事項のみを引用する。

### 第一時

紫式部はどんなにりこうであつたか？

十四頁五行「其の頃から」とはいつ頃からか？

十四頁七行「紫式部の名は一世に高くなりました」とはなぜか？（この所敷衍）

十四頁九行「円満な深みのある人」とはどんなのか？（この所敷衍）

十五頁五行「かう考へる」とは何か？

源氏物語は大体どんなことを書いたのか？

源氏物語はなぜ世界的にも名高いのか？

### 第二時

僧庵の中の尼さんの様子は？

紫の君（十ばかりの女の子）の様子は？

女の子のかはいらしい様子は？（十七頁）

十八頁四行「女の子はさもなくやしさうである」とはどこで分るか？

十九頁四行「かうなんでせう」とはどうなのか？

十九頁五、六行「何時とも知れない身」とはどういふことか？

二〇頁七行「さうく」の語にこもる意味は？

二二頁二行「さすがに」の意味は？

尼さんと少女との間に於ける感情のあらはれは？

此の文の特にたくみな所は？

### 第三時

それから尼さんはどうなつたのか？ 紫の君は？

源氏の心持は？ 紫の君の心持ちは？

二二頁一〇行「其の鼻を赤くぬつて見せた」とはなぜか？

二三頁六行「まあいやなことをおつしやる」といつた紫の君の心持は？

二三頁一一行「まじめな顔をしてゐる」―此の時の源氏の心持は？

二四頁七行「紫の君はすっかり晴れやかになつた」とはなぜか？

此の文を読んだ感じは？

此の文の特にうまい所は？

繰り返しになるが、この指導書における「源氏物語」の扱い方の特色は、教材後半の口語訳の部分の描写に対する強いこだわりにあるといつてよい。この点は、後述する、佐藤徳市・山内才治の『小学国語読本指導書』のように、前半の「源氏物語」と紫式部についての解説部分を中心に、世界に誇り得る文学という概念のみを押し出すものとは対照的である。

文部省の教師用書に記された内容の確認の範囲内にとどまることなく、独自の見解を打ち出そうとしている点は、意欲的であるといえよう。もちろん、先にも述べたように、原典と教材文との関係において不明確なところはあつたものの、国家主義的思想啓蒙や女子教育の書としての観点が強調されず、文学的な読みこたわろうとする姿勢が示されている。大正時代の文学教育隆盛期の余韻ととらえられようか。

### 三、佐藤徳市・山内才治「小学国語読本指導書」 ——偉大な源氏物語と爛熟した平安文化

広島高等師範学校訓導の佐藤徳市（注4）と東京高等師範学校訓導の山内才治（注5）による『小学国語読本指導書』尋常科用巻十一は、昭和十三年五月に賢文館から刊行された。

「巻十一 編纂精神と其の指導概説」においては、「源氏物語」に対する言及が乏しい。「国民精神の涵養」に資するための教材としてその名があげられている程度である。ただ、これを「国文学史教材」に位置付けて、国文学史が概括的に述べられている。その中で、平安時代については次のように記されている。

次には平安時代の文学について、あるが、この頃をば一般に中古時代と呼ばれてゐる。この時代には仮名文字の発明と言ふ大きいエポックメイキングがあつて、上古時代の文学とは著るしくその趣きを異にしてゐる。即ち男は漢文学を学び漢文を作つてゐる間に上流の女は仮名をもつて柔かい和文を書き、歌集も物語も沢山あらはれた。こゝに至つて、支那文学と仏教の影響はもつとも著しくあらはれた。驕奢風流で閑雅優美の時代であるからして、文学も亦織麗艶美を極めたが、しかし丁度この時代の貴公子の様に弱々しい女らしい処がある。何にせよ、始めて国語で何も何にも綴れる様になり、日記も出来れば歴史も出来ると言ふ風になつたのは此の時代となつてからである。其の詞の中には多少の漢語や仏語もあるけれども、漢文から離れて別に発達をしたもので、この時代の国文は後世の模範文となつてゐる。平安時代の文学は全く華やかな時代と言ふことが出来よう。それから幽鬱な鎌倉足利時代の文学があり、その次に又賑な江戸時代の文学が起るのである。小学校には特に日本文学史だけをとりたて、教へる機会が与へられてゐないから、これ等「国文学史的教材」の指導にあつて心して指導しなければなるまいと思ふ。

上代は男性的、中古は女性的といったジェンダーと関連させての理解、また、それゆえに導き出される平安時代の文化に対する否定的な見解——これらは、明治時代以降の代表的な文学史のテキストにしばしばみられるものであつて、オリジナリティはない。ただこのことをあえて記そうとする態度は、指導書としては一般的ではなく、後述するように、教材「源氏物語」の理解にも微妙な影を落とすこととなる。

また、「巻十一 教材配当表」には、その「指導目的」が、「この文を読ませて源

氏物語の偉大さを理會させ、その我が国文学史上の地位について知らせる。」とだけ簡潔に記されている。この教材の価値をこの側面にのみ限定してとらえるところも本書の特色の一つである。

この教材について詳述する章「第四 源氏物語」は、「教材観」「指導過程」の三部からなる。

「教材観」では、まず「文の主題」が次のように述べられている。

源氏物語は、我国文学作品中の随一であるばかりでなく、実に世界最古最大の小説の一たることは疑ひのないことである。かゝる傑作を有することは、我が国民のひとしくほこりとせねばならぬことは勿論、更にその実質についても国民がよく理會して置くべきであらう。併し乍らその内容は爛熟しきつた平安時代の貴族生活を書きあらはしたもので、直ちに幼少子弟の前に提示することは六かしい。本教材それ等の点に充分考慮をはらつて、特に無邪気な子供の生活を描いた場面をぬき出して現代文に直してある。この文の主題とするところは、源氏物語の偉大さにある。

この、原典「源氏物語」に対する懸念は、「指導観」の中の「指導上の注意」でも次のように反復されている。

前述の通り、この源氏物語は、爛熟し切つた平安時代の貴族生活を描いたもので、その全部を赤裸々に子供の前に提示することは、教育的ではない。故にこの文章以外に、源氏の好色生活などを種々補足する様な事は差しひかへなければならぬ。たゞこゝでは、この源氏物語が、我等の祖先の生んだ偉大なる文化である事を、充分に了解させたいものと思ふ。

もちろん同様の注意は文部省の「編纂趣旨」等にも記されているのだが、他の指導書にくらべてこの問題へのこだわりが強く感じられる。

「指導過程」には、全五時間の授業展開の要点が記されている。特に変わった記述はみられないが、「この文の主題とするところは、源氏物語の偉大さにある。」という先の見解をふまえた次のような記述が見える。

我が国文化史上に於ける平安時代の地位について、国史との関連によつて子供に語らせ、又は教師補説する。これによつて、「源氏物語」の出現の偶然でないことを知らせたい。（第一次 6）

なほこの場合、紫式部についての補説、「源氏物語」の文学史上の地位及びその内容一般についての補説をしてやる。（第五次 2）

全体としては、原典「源氏物語」の内容にはできるだけふれずに、その偉大さだけを認識させたい、といった方向性が感じられる。にもかかわらず、やはり「参

考」として、口語訳の部分の原文が最後に紹介されている。このあたりは、指導書の書き方のパターンとして、このような型が強固に意識されていたことによると思われる。

#### 四、岡田稔・川瀬知行「小学国語読本国文学教材の新研究」 ——「優秀国民としての態度をも培ふ」

愛知県第一師範学校教諭の岡田稔（注6）川瀬知行（注7）の執筆による「小学国語読本国文学教材の新研究」は、昭和十四年一月に東洋図書株式合資会社から刊行された。その書名からも知れる通り、本書は読本各巻の全教材について解説したものではなく、厳密な意味での教師用指導書ではない。ただし、読本中の国文学教材のすべてに言及していることから、指導書に準ずるものとしてここで取り上げた。

なお、新しい教科書の使用は昭和十三年四月に始まり、橋純一による「源氏物語」批判も同年六月から展開され、既に他方面からこの教材や橋の発言に対する賛否が論じられていた。そのことが、昭和十四年一月刊の本書の内容に陰を落としていた可能性も充分にある。

本書の「序説」には、国語読本に国文学教材が多く採られている理由について、「此等の作品に現はれてゐる国民的感情を、自己の精神生活に容れることは、即ち国文学の作品を通じて文学精神を涵養することは、所謂国民精神の涵養に最も端的な方法であり、且又最も必要なことでもある。」と述べられている。そして、その方法として口語訳などが用いられていることについて、「児童の程度に応じて適宜改作して示して差支ないばかりでなく、一般に理解に困難な言語や文脈をもつ古典に於ては、それが絶対的に必要であらう」としている。「サクラ読本」での新しい試みを全面的に肯定しているわけである。

このような読本に対する評価に立つて、本書の内容と意義とを次のようにまとめていく。

本書はかゝる意味に於て、小学国語読本中特に国文学作品より取材せるものを摘出し、此れに私考を加へ、その原典を研究せんとしたものである。その本願とする所は教授者に呈して、間接に児童に、より深く国民精神を把握せしめ、国民的信念に燃えしめ、日本国民たるの自覚に生かしめんとするに他ならない。

教材研究における原典重視は、どの指導書にも見える常識的見解ではあるが、本書はそれを最も明確に、そして強く主張したものと見える。

「序説」ではさらに続けて、教材研究における原典の重要性が、次のように説かれている。

所謂教授法なるものを説く人は、やゝもすれば技巧なその如き末節の事のみ云々するやうであるが、単なる技巧よりも、教授者は教材の真精神を正しく深く理解することが最大緊要事である。其処に教材の出典の研究が必要になつて来ると思ふ。教材の真意義を解せずしては、正しい教授は不可能である。此れを正しく理解してこそ、初めて国定教科書の意義のある所を児童に徹底せしめ得るのである。原典研究の必要は実にこゝに存する。前々読本に「国定読本溯源」の著があつて、大いに世に行はれ、前読本に国語読本国文学教材の解説（岩井良雄氏）があり、新読本に詳註口訳小学国語読本原撰集（新田寛氏）の出版が遂次行われてゐるのもこの為である。本書編者の主目的が一にかゝつて此処に存する事も亦勿論である。然しながら本書が目ざす所は単なる原文典の注釈を以て能事終れりとするものではない。かゝる原典によつてこの教材が生ずる迄の編纂者の苦心をうかゞひ、その国文学史上の地位と教材的価値とについての批判、取扱上の注意等に対して、重要な示唆を与へんとするにある。もしそれ教授の方法に至つては、その教授者のもつ学識によつて、教材を消化する処に案出せらるべきものである。教材を極めぬ教授法の愚劣さについては、今更喋々する必要はあるまい。読者の真摯なる研究を望む所以である。

先にも述べたように、既にこの時期、橋による「源氏物語」批判が展開されていたのだが、その「源氏物語」は「平安朝貴族の頹廢した日常生活を如実に語るもの」という批判に対して、井上超は次のように反論していた。

これと関連して考へて頂きたいのは、原撰と教材の区別であります。読本の教材の原撰の研究はかつて盛に行はれた時代があり、今日も熱心によつてゐる人があります。併しさうてふ人はやゝもすれば原撰を教材以上のもの、如く考へたがるくせがありまして、これが国語教育に大いなる禍を来すのであります。原撰はどこまでも素材であつて、教材ではないのであります。

（中略）

古典の中には子供に直接与へてはいけないものもある。子供を古典へ古典へと導くのではないといふのはそこでありませぬ。新読本にあれだけの古典教材をいれるについては、教育的に生かす為に実に苦心を重ねて来たものでありまして、うかつに出しては無いのであります。古事記にしても源氏物語にしても現代語訳などを漫然と読ませるといふのでは決してないのであります。

〔国語教材論〕「国語教育」昭和十三年十二月号

教材「源氏物語」の口語訳部分は原典とは區別して扱ふべきものだ、という井上の主張からすれば、本書の主張は「国語教育に大いなる禍を来す」ものとなりかねないところがある。今日考えれば、小学生向けに内容を修正しての口語訳である以上、井上の主張が至極当然の見解に思われるが、本書をはじめとする多くの指導書の筆致からは、そのような発想が当時いかに新奇であり、理解されにくいものであったかがうかがえる。

さて本書では、教材「源氏物語」を、どのようにその原典と関連させて扱っているのだろうか。

「五十二 源氏物語」では、まず【考】として、次のように教材の価値が論じられている。

源氏物語と枕草子とは昔に平安朝文学の双壁たるのみならず、実に我が日本文学史、否世界文化史上に於ける優編である。殊に源氏物語は世界最古最大の小説であると言ひ得よう。此れが如何に優れた又如何に尊い文学作品であるかは、教科書本文の前段によつても明かであるが、此れ等の事を会得せしめると同時に、既に九百年前にかゝる世界に比類のない立派な作品を、一女性の手より生み出し得た日本の精神文化は、如何に優れたものであり、如何に世界に誇るべきものであるかを、児童をして自ら覚らしめ、且感銘せしめることも、本科の目的であらねばならない。前半に於て紫式部を紹介し、源氏物語の何物たるかを述べ、後半に於てその翻訳された例文を示し、繊細優雅な平安皇城裡の貴族生活の一断面を描き出して、日本文学の最高峰としての源語を知らしめ、日本文学に対する親悦の情を誘ひ、愛護の心を起さしめようとするのである。殊に後半前段の巧みな人物描写或は幼くて母を失つた可憐な紫の上とその祖母とのいぢらしい肉親愛の表現、或は後段の不幸な運命の下に生ひ成つて行く少女紫の上を暖かい優しい心でいたはり育んで行かうとする源氏の繊細な心情の描写など、文学的鑑賞眼を啓き、作者が如何に優れた創作的才能の所有者であつたかを知らしめる好個の教材である。此等に充分触れしめることに依つて児童の古代文学に対する文学趣味を養ひ、古の皇国精神文化に対する深い感銘を与へ優秀国民としての態度をも培ふことが出来ると思ふ。尚最後に、此の如き取扱ひに於て特に注意すべきは、此の前半と後半とを全く別々のものに分立したものとしないで、融合してあるものとしなければならぬといふことである。

単なる文学鑑賞の域にとどまらず、「優秀国民としての態度をも培ふ」ことを教育

目標として掲げていることが注目される。「編纂趣旨」はここまで踏み込んでいないが、世界に誇るべき最高の文学としての「源氏物語」という理解を、「国体の本義」などで展開されていた論理と結び付ければ、当然たどり着く目標といえよう。

次に、作者の紫式部や原典である『源氏物語』の解説が、約八ページにわたつて掲載されている。内容は事実と各巻の梗概の羅列がほとんどで、その筆致は淡々としている。いわゆる「源氏物語」に対する否定的評価については、その末尾の方で次のように簡単にふれて否定している。

往々にして源氏を誨淫の書の如くに見て来た者もあるが、その浮華妖艶に見えて、而かも何処か必ず真剣な所があり、一度び契りし人を終世捨てない誠実さは、平安朝的・文学的真実の表現であり、主人公源氏の性格であると同時に麗しい人間の表徴で、此の書が純文学たる所以であり、代表的国文学作品と仰がれる所以でもある。

続いて、「源氏物語」の教材の典拠となつた部分の原文が掲載され、この章は結びとなつている。原文の掲載は珍しくはないが、語釈の付されているところが、他には見られない特徴である。このあたりも原典重視の姿勢の表れであろう。

以上のように、原典重視の姿勢を前面に打ち出した本書ではあるが、原典の熟読や文学史的な知識を教材解釈や授業展開にどう生かすのか、といったことについては、具体的には何も記されていない。また、井上らが懸念した、いたずらに原典の内容を紹介することの危険性についても、何もふれられていない。そのような心配は不要とばかりに、楽観視しているようである。

本書の著者は、口語訳の部分の鑑賞を強調しつつも、結局は国粹的な文学史観を提示したにとどまり、教材の扱い方は、「教授者のもつ学識によつて、教材を消化する処に案出せらるべきもの」として、教師にゆだねられている。

## 五、結 語

最後に、以上の指導書類の記述の特色を整理してみたい。各々の指導書の記述が、読本の編纂者である井上越の意図からどのように逸脱しているか、という書き方が分かりやすいと思われるので、以下、そのように整理してみた。

井上越の意図を、『小学校国語読本尋常科用巻十一編纂趣旨』と『小学国語読本総合研究』巻十一の記述からまとめるならば、以下のようになる。

①この教材は、「国民文化」の諸相の具現を編纂主題とする巻十一における、中軸教材の一つである。

②この教材は、我が国の文学の最高峰であり、世界的文学の地位を勝ち得ている源氏物語の面影を見せようとするものである。

③この教材は平安朝の文学を扱う点で巻十の「雪の山」（枕草子）と、また国語と仮名文字との関係にふれたことで、巻十一の「古事記の話」と呼応する。

④口語訳の部分に描かれた紫の上の無邪気な姿は、女子教育の教材でもある。⑤口語訳の部分は、教育的見地から削除変更を施したので、原文を参照するにしても、十分な配慮が必要である。

①の、巻十一における中軸教材というところへかたは、各指導書に踏襲されている。ただ、佐藤・山内『小学国語読本指導書』は、比較的その位置付けが不明確である。

②の、国文学の最高峰、世界的文学としての源氏物語の面影を知らしめる、という教材の意図については、そのことのみを教材の本質として強調する佐藤・山内『小学国語読本指導書』に対し、口語訳の味読を通しての文学趣味の涵養に重点を置く秋田『小学国語読本指導書』と宮川『小学国語読本解説』、その両面を主張しつつ結局は「優秀国民としての態度」の育成へと傾く岡田・川瀬『国文学教材の新研究』といった違いが見られる。日本人としての自覚を促すための思想啓蒙教材と見るか、あくまで文学鑑賞を主眼とするかの違いが見られるといえるか。

③の、他の教材との関連性・系統性については、佐藤・山内『小学国語読本指導書』が、文学史教材として同じ巻の「見渡せば」「古事記の話」との関連、また平安京の現在と過去という点で前課「京都」との関連を指摘。秋田『小学国語読本指導書』は女子教材として「姉」「月光の曲」との関連を指摘。宮川『小学国語読本解説』、岡田・川瀬『国文学教材の新研究』は言及がない。

④の、女子教育の教材としての「源氏物語」については、秋田『小学国語読本指導書』が巻頭の「概観」で女子教育としての観点を示すものの、編纂者が口語訳部分の紫の上を中心に述べているのに対し、秋田は前半の解説部分の紫式部像を中心に述べている。宮川『小学国語読本解説』、岡田・川瀬『国文学教材の新研究』、佐藤・山内『小学国語読本指導書』には言及がない。

⑤の、原典・原文との関連であるが、「源氏物語」そのものの姿は教育上提示できないという「編纂趣旨」と同様の理解を前提としながらも、いずれも参考資料として口語訳の部分の原文を掲載する。秋田『小学国語読本指導書』は、「源氏物語」の否定的評価には一切言及しない。岡田・川瀬『国文学教材の新研究』も否

定的評価に簡単に言及するがすぐさまそれを否定している。宮川『小学国語読本解説』は、原典の否定的側面に微妙な言い回しで言及しつつ、教材化されたものについては「原文としても、決して非教育的な部分がないから、或る部分は原文と本文を対照せしめつ、本文の如何に文学的であるかを理解せしめるがよい」と言い切っている。それに対して、佐藤・山内『小学国語読本指導書』では、「この源氏物語は、爛熟し切つた平安時代の貴族生活を描いたもので、その全部を赤裸々に子供の前に提示することは、教育的ではない」といった、原典に対する否定的評価が明確に述べられている。

各々の指導書は基本的には編纂者の意図を大きく逸脱することがなく、どちらかといえば没個性的なものにとどまっている。したがって、いずれも「時局」下での体制迎合型の文章である点において変わりはない。ただし、その主張の細部においては微妙な食い違いも見られ、編纂者の意図を離れて、教材「源氏物語」が多様な受け止められ方をし、一人歩きを始める可能性を読み取ることができるといえる。

いささか強引に、各指導書の違いを際立たせて整理するならば、次のようになる。まず、「源氏物語」が世界に誇りうる日本の文学作品であることを示しての国威高揚を第一の目的とする佐藤・山内『小学国語読本指導書』に対して、他のものは、あくまで文学鑑賞を主目的とする。それゆえに、佐藤・山内が教材前半の解説部分を重視するのに対して、他のものは後半の口語訳部分を重視する。また、文学鑑賞を中心としながらも、秋田『小学国語読本指導書』や宮川『小学国語読本解説』がどちらかといえば個人的な感性の問題としてそれを扱う傾向が見えるのに対して、岡田・川瀬『国文学教材の新研究』には、「国民的」な思考感動や民族の優秀性の理解が究極の目的として掲げられている。

(注1) 国語教育学会編『小学国語読本総合研究』については「小学校教材「源氏物語」と時局——「サクラ読本」における本居宣長——」(『国語国文学報』第五十五集・一九九七年三月)、芦田恵之助『小学国語読本と教壇「教式と教壇」については、「小学校国語科教材「源氏物語」(第四期国定教科書)の反響・その二——昭和十三、十四年の研究者・教師・児童の反応——」(『愛知教育大学大学院「国語研究」第六号・一九九八年三月)、友納友次郎『教法精説 新読本の指導精神』については、「小学校教材「源氏物語」の反響・その三」(『国語国文学報』第五十七集・一九九九年三月)において言及した。

(注2) 秋田喜三郎、明治二十(一八八七)年、昭和二十(一九四六)年。滋賀県師範学校附属小学校訓導を経て、大正九年からは大正自由主義教育の中心的役割を果たした奈良女子高等師範学校の附属小学校に赴任し、昭和十年まで勤務。昭和十六年からは国定教科書の編

纂に携わる。研究同人誌『学習研究』（目黒書店）の編集執筆のほか、『創作的読方教授』（大正八年・明治出版社）などの著作がある。

(注3) 宮川菊芳、明治二十四（一八九二）年～昭和二十（六一九五）年。新潟県高田師範学校訓導などを経て、大正十年より東京高等師範学校訓導。以後小学校校長などを歴任し、戦後は国語審議会臨時委員なども勤めた。『読方教育の鑑賞』（大正十三年・厚生閣）以来一貫して、鑑賞を重視し文芸趣味の育成を第一義とする読み方教育を主張し続けた。

(注4) 佐藤徳市、明治三十三（一九〇〇）年～昭和五十六（一九八二）年。宮城県女子師範学校訓導を経て、大正十四年より広島高等師範学校訓導。昭和十五年以降は、仙台市で視学官や青年学校長、中学校長、教育委員会などを勤めた。『生命の読方教育』（大正十五年・厚生閣）などの著作がある。

(注5) 山内才治、明治二十九（一八九八）年～昭和四十七（一九七二）年。宮城県師範学校訓導などを経て、昭和六年から東京高等師範学校訓導、昭和十六年以降は、仙台の視学官や小学校長などを歴任。『素直な読方教育』（昭和九年・賢文館）などの著作がある。

(注6) 岡田稔、明治二十七（一八九六）年生。小学校、商業学校、中学校教諭を経て、昭和五年から愛知県第一師範学校教諭。昭和十七年から愛知県立小牧女学校校長。『新釈萬葉集』（昭和二十三年・博文堂）、『鈴木胤——百三十年記念——』（昭和四十二年・鈴木胤顕彰会、市橋鐸と共著）などの著作がある。

(注7) 川瀬知行、明治四十一（一九〇八）年生。昭和九年から愛知県第一師範学校教諭。戦後は名古屋工業大学に勤務。

（平成11年9月8日受理）